2022年度学内研究助成 成果報告書

① 報告者所属・氏名

下田歌子記念女性総合研究所　　久保貴子

② 事業名

日本における近代女子教育者の教育基盤の研究

③ 事業の目的

近世末～近代初期の改革期は、女子の「教養」と「学問」とが混在する時代であり、そのように規定することで、日本の近代女子教育が成立する過程について新たな知見が得られる。実際の教育現場において、女子の「教養」と「学問」とが明確に区別されていたのかは別にして、例えば、「教養」としての書写や女子が携わる手芸などの手引き書がある一方で、男子と同様の「学問」としての『論語』学而篇や『孝経』などの教授がある。明治32年「高等女学校令」の発布までの期間にも、女子の教育は粛々と行われており、これら担い手の多くはカトリックを中心とした私立の英学校や、跡見花蹊（跡見学校）や下田歌子（下田学校・後、桃夭学校）らによって創設された私塾などであった。

本研究は、上記の把握から、これら私塾の果たした役割に焦点を当て、その基礎を築いた女性創立者たちはどのような教育を受けてきたのかを調査する。そのことによって、女性創立者たちが思い描いた女子教育が、自身の受けた教育とどのような関係性を持っていたのかが明らかになり、それによって、女性創立者がどのような環境の中から生まれるに至ったのか詳らかになるであろう。いわば女子教育の主導者は突然、西洋化の波の中で出現したのではなく、それ以前の伝統的な学問の土壌と関わっていたことを明らかにすることで、より立体的にその思想や基盤が見えてくるはずである。

具体的には、当時藩校を中心とした男性の「学問」と家庭教育を中心としていた女性の「たしなみ・教養」という明らかな区別があった中から、跡見や下田のように女性創立者となっていった彼女たちの出自と、その学問基盤、またその後の経歴から開学に至る過程を見極め、女性創立者たちが受けた教育がいかにして彼女たちを、教育者に転身せしめたかという問題を考察するものである。さらに女性創立者たちにとって、西洋文明に直面することになった近代という時代がいかなるものであったかまで明らかにすることで、女性教育者を流動する時代状況から位置づけなおすことにつながるだろう。個々人の特質もより鮮明になるに相違ない。

④ 事業実績・研究成果（具体的に）

明治時代の著名な女性が受けた教育がいかなるものかを概観すると、近親者や私塾で学んだ者が多いことに気付かされる。

本研究では、特に三輪田真佐子、棚橋絢子、跡見花蹊、下田歌子に焦点を当てて研究を進めた。この4名は、いずれも私塾や家人から学び「学問」を続け教育者となっていく点で共通しており、私塾の教育には男女の区別が感じられなかった結果と認めて良いと思われた。

跡見、下田の両名は、明治宮中に奉仕した経験があるという点でも共通しており、伝統的文化の中枢とも言うべき中から、新しい女性の生き方を模索した結果とも言える。棚橋は、

早い段階で、女子も男子と同じ教育を受けるべきであると主張してもいる。

いずれも学校制度、とくに女子の学校制度が整わない中で、それぞれの学問に対する姿勢や考え方を基に、独自の女子教育を構築している。やがて教育者になっていく人物たちであるが、その生きた時代の女子が受けた「修養・たしなみ」とは異質の、男子と同じ「学問」を受けていたことが確かめられた。このような下地が女子教育者を生み出していたと言ってよいだろう。津田梅子、石井筆子、安井てつも渡欧して男女共通の教育を受けた経験からその後、教育者への道を歩むことになった。

また、これらの研究結果から、他の女性教育者とは違う、下田歌子の独自性も明らかになってきている。膨大な数の著作によって、直接下田の講義に触れることが出来ない女性たちに向けて、その講義内容を発信し、当時教育が遅れていた北海道や東アジア地域の「教育開拓」ともいうべき行動を起こしていることは、注目に値する。このような学校の外側へ向けられた教育活動の一端を明らかにすることができたが、今後、まだまだ研究が深められるべき領域であろう。

そして、その「教育開拓」がどのようなものであるかを明らかにするために、本年度は特に、信越方面とその周辺での下田歌子の教育活動に焦点をあてて調査した。帝国婦人協会の設立は、下田歌子にとって大いなる一歩であり、協会設立を契機に半年ほどしての信越支会、新潟支会が設立された。これらは現在の新潟県立新潟常盤高校、新潟青陵大学・同短期大学として継続しており、その意義は大きいと思われる。また、北海道の北見女学校については、これまでほとんど研究が進められてこなかったため、現地に赴いて実地調査を行った。「北見女学校」は北海道の特に旧北見国においてまさに女子教育の先駆となった女学校であることが明らかとなった。現在の北海道立桂陽高校に至るまでその校章が受け継がれるなど設立の意義と存在の大きさを確認することもできた。

富国強兵の掛け声のもと、括弧つきの女性の社会進出が進む中で、女子教育者たちの歩みもまたそれぞれ分かれた。女子教育者たちの歩みは、成長過程で学んだそ学問とどのような関係性を持つのかという問題意識から、下田歌子と明治天皇皇后美子との関係を中心に、そこに儒学者の父から受けた下田の教育がどのように関連しているか考察を深めた。

⑤ 研究成果の発表・活用（学会発表・論文掲載・地域連携・産学連携など）

・口頭発表「『信越紀行について』」（下田歌子記念女性総合研究所研究会 2022・6・29 オンライン開催）

・論文「『信越紀行』と下田歌子の父祖意識–付・東條琴臺石碑建立考」（下田歌子記念合研究所「年報」第 9 号、2022・2）

・北見女学校関連調査報告

付：出張報告書

なお、昨年度結成した「大陸人脈研究会」研究会において「下田歌子と大陸女子教師派遣—特に河原操子について—」（2022・12・30 オンライン開催）のテーマでディスカッションを行った。

⑥ 今後の展開・継続性について

女子教育者たちが築いてきた教育とそれを支える基盤となった教育との関係性を明らかにしてきたが、その教育の理想が達成されている部分（女子が家庭や寺子屋で読み書きを学ぶことからはじめ、男女が同じ内容の教育を受けることを理念と掲げるなど）と、理想が実

現されていない部分（教育の平等価値観を除き、家制度に相応しい理想的な女性像のための教育制度にとどまるなど）との関係も明らかにしたい。さらに、そのことから、男女が平等に扱われる、現代の学校教育の考え方との共通性と異質性とを明らかにする。

また当時の女子教育者たちをめぐる資料は必ずしもその創設した学校や機関に残されているわけではなく、地方や海外の図書館や資料館などに残されているものも多い。こうした未紹介の資料の発掘にも努めたい。